

仁川沖海戦(1)

明治 37 年 2 月 8 日朝、仁川の日本居留民の多くは不安におののいていた。常に港内にはいるはずの巡洋艦「千代田」の姿がなくなっていた。ロシアの巡洋艦「ワリヤグ」の 6500 トンと比べると「千代田」は三等巡洋艦で 2439 トンと小さかったが、停泊しているだけでも居留民に安心感を与えていた。それが突然いなくなり、ロシア艦隊が攻めて来るといふ噂が流れていた。いざというときは山に逃げようと覚悟を決めた人がかなりあった。

不安な気持ちで数時間過ぎた午後 3 時ごろ、だれかが「八尾島の向こうに煙がみえるぞ」と叫んだ。みんな我先にと見晴らしのよい日本公園に走り、自宅の屋根に登った。ロシアの艦隊か、それとも日本軍かと目をこらしているうち船影はだんだん大きくなった。先頭の船は「千代田」だった。後ろに 10 隻近い船を従えていた。期せずして万歳の叫び声があがり、足を踏みならして喜ぶ人もあった。そのころになってようやく領事館から「わが陸軍が上陸する。各戸分担して受け入れよ」という指示があり、1 戸あたり 10 数人の割り当てがあった。

日本とロシアは半年以上も外交交渉を続けていたがロシアは強硬な姿勢を崩さず、日本は 2 月 6 日、国交断絶を通告して連合艦隊を佐世保から出港させていた。連合艦隊の主力は旅順に向かうが、瓜生外吉中将を指揮官とする第四戦隊の「浪速」、「高千穂」、「新高」、「対馬」と新鋭艦「浅間」を加えた艦隊は木越安綱少将率いる第 23 旅団の将兵 2200 人が乗る輸送船「大連丸」、「小樽丸」、「平壤丸」を護衛して韓国のどこかに上陸させる任務を負っていた。瓜生司令官は「千代田」の村上格一艦長に対し牙山湾沖のペーカー島付近で 8 日午前 8 時に合流するよう指示していた。

問題はロシアの「ワリヤグ」と砲艦「コレーツ」に気づかれないで「千代田」が出港するにはどうすればよいか、だった。当時仁川港には日露以外に英艦「タルボット」、仏艦「パスカル」、伊艦「エルバ」、米艦「ヴィックスボルグ」が停泊していた。村上艦長は 6 日のうちに、「タルボット」によって「ワリヤグ」から死角になる位置に「千代田」を移動させた。そうして 7 日午後 11 時半、音を立てないよう注意しながら出港したのだった。

「千代田」は予定どおり 8 日午前 8 時第四戦隊と合流、村上艦長は仁川の状況報告のため瓜生司令官に面会した。瓜生司令官は将兵を牙山、牙山が危険な場合はもっと南の路梁津に上陸させるよう指示されていた。これに対して村上艦長は仁川に上陸させるべきである、と進言した。第 23 旅団の目的はまず漢城を押さえて韓国政府を味方につけ、早く鴨緑江沿岸まで制圧することだった。そのためには漢城から遠い牙山や路梁津ではなく仁川にすべきだという理論だった。「ワリヤグ」や「コレーツ」がいる仁川はそれこそ危険ではないかと質問した司令官に村上艦長は「大丈夫です。やれます」と答えた。「一山楼」で一晩飲んで、「ワリヤグ」のルードネフ艦長の性格や行動様式をよく観察していたからこそその判断だった。「千代田」を先頭に第四戦隊は仁川への進路を採ったのだった。

仁川沖海戦(2)

瓜生外吉少将を指揮官とする第 4 戦隊は「千代田」を先頭に「高千穂」、「浅間」と続き、その後を 2200 人の将兵を乗せた輸送船「大連丸」「小樽丸」「平壤丸」が進んだ。輸送船の両脇には 8 隻の水雷艇が防御を固め、後衛として瓜生司令官が座乗する旗艦「浪速」があたり、「明石」「須磨」が従った。

第 4 戦隊の第一の目的は木越旅団の兵士 2200 人を無事上陸させることだったが、仁川港に滞在しているロシアの巡洋艦「ワリヤグ」と砲艦「コレーツ」を撃破することも隠れた目的としていた。「ワリヤグ」には 600 人を超える兵士が乗っており、仁川に停泊しているだけで日本軍にとって脅威だった。

第 4 戦隊の参謀だった森田慶三郎中佐(のち海軍中将)はある懐旧談のなかで「我々が最も心配したのはロシアの二隻の軍艦に逃げられるのではないかということだった」と述べている。海軍軍人としては陸軍兵の輸送援護よりも海戦に焦点を当てていたことがよく分かる。しかし山本権兵衛海軍大臣から「中立港である仁川港内では

国際問題になりかねないので攻撃してはならない」という命令が出されていた。

第4戦隊の先頭の「千代田」が仁川港西13キロの八尾島にさしかかった午後3時半ごろ、港内から「コレーツ」が出てきて「千代田」とすれ違った。森田参謀らが恐れていた事態がまさに起きようとしていたのである。「コレーツ」の甲板には、艦同士がすれ違う時の儀礼に従って衛兵が並んで立っていた。「千代田」も急いで衛兵を並べさせた。両艦は100メートルの距離まで接近した。すれ違った所は仁川港内か港外が微妙な場所だった。

「コレーツ」が八尾島の南を通過し外洋に出たところで第4戦隊の水雷艇が取り囲み行く手を遮った。このとき日露間で最初の交戦が起きている。どちらが先に砲撃したのかについては諸説あり判然としないが双方が発砲したのは間違いない。ロシアの戦史のほとんどは日本側がまず砲撃を開始、「コレーツ」は応戦したとなっているが、日本の公式の戦史である「明治37、8年海戦史」には記述がない。ただ水雷艇の指令艇「蒼鷹」の機関将校だった吉崎徳一郎の手記が残されている。この手記では「4艇これを挟みて逐還せり。この時に当たりて敵はついに砲火を開きたり。これ即ち日露戦争の濫觴なり。時あたかも2月8日午後4時過ぎなり。わが司令艇は未だ戦闘旗を掲げざりしも、ことここに至りてはやむなく帆柱高く戦闘旗を翻し、僚艦これにならい「雁」などから魚雷2発を発射すれど命中せず」となっていてロシア側が先に発砲したと書いている。

興味深いのは大英帝国国防委員会戦史部がロンドンで発行した「公刊日露戦史」によると「コレーツではいったん浅間に対して礼砲を撃つという命令が出され、それが取り消されたが、取り消し命令が誤解され2発の弾丸が発射された」とし、最初に発砲したのはロシア側としている。

砲撃戦は「コレーツ」が方向転換し仁川港に戻る姿勢をみせたためすぐに終わり、瓜生艦隊は「コレーツ」を抱きかかえるようにして仁川港に入港したのだった。8日の午後5時ごろだった。

仁川沖海戦(3)

瓜生艦隊が入港して来るのを目の当たりにし日本居留民たちの喜びようは大変なものだった。ロシア艦隊がやってくるという噂が流れ、不安におののいていたところに日本の艦隊が現れたのだから無理もない。

瓜生艦隊は港内にはいると「千代田」と「高千穂」がぴったりと「ワリヤグ」のそばに停泊、さらにその内側を4隻の水雷艇が取り囲んだ。「浪速」など艦隊の主力は港内を一周して威力を示したあと八尾島の西に布陣しロシア艦が逃げだせない態勢を採った。

3隻の輸送船は「ワリヤグ」の横を通って棧橋に近づいた。仁川港では接岸できないため、輸送船にはそれぞれ平底の大型ボートが5隻ずつ積み込まれていた。棧橋の手前数100メートルで停泊するとすぐにボートがおろされ、木越旅団の上陸が始まった。2月上旬の午後5時半過ぎだからあたりは暗くなりかけたが、居留民は総出でかがり火を焚き上陸を支援した。それでも2200人全員が上陸し終えたのは9日の午前3時ごろだった。

この間、「ワリヤグ」の乗組員たちは甲板から啞然と見守るばかりだった。「見事な敵前上陸」と日本では評判になったが、ロシア側の資料によると「ワリヤグ」のルードネフ艦長はウラジオストックから仁川に出発する前、極東総督アレクセイエフから「日本が兵を上陸させても妨害してはならない」と命令されていた。アレクセイエフは国王ニコライ2世から「日本兵が北緯38度線の北に上陸する場合は徹底的に攻撃せよ。南側だったら抵抗するな」という訓令を受けていたのである。ロシアは帝政時代から北緯38度線を「生命線」として意識していたことがよく分かる。第二次大戦後設定された38度線も、ロシアが昔から抱いていた意識が働いた結果といえるかもしれない。

ルードネフ艦長は自分の身に降りかかってくる危険を察知していたようである。仏、伊、英各国軍艦の艦長から日露国交断絶という情報を聞き6日、還城に行きパブロフ公使と会って「千代田」が出港準備をしていることを報告、「ワリヤグ」と「コレーツ」の仁川からの退避を提案している。しかしパブロフ公使は国家の威信にかかわるとして反対した。

いったんは諦めて艦に戻ったルードネフ艦長だったが、翌日、スピードが早い「ワリヤーク」は日本艦に対抗できるが「コレーツ」は無理であり退避させるべきであるとパブロフ公使に進言、了承を得た。そこで「コレーツ」は旅順に向けて出港したところで瓜生艦隊に遭遇したのである。

港内に戻った「コレーツ」のベリヤーエフ艦長は直ちにルードネフ艦長に戻らざるを得なくなっただけで報告、ルードネフ艦長は各国軍艦の艦長に日本へ抗議するよう要請した。仏、伊、英、米4国の艦長は相談のうえ先任である英国「タルボット」艦長のベイリー大佐が総代として「高千穂」の毛利一兵衛艦長を訪ねてきた。参謀だった森山慶三郎少佐の懐旧録によると以下のような会話が交わされた。

「ここは中立港である。われわれ第三者に損害を与えるような行動はなさらぬでしょうな」

「われわれは陸兵を無事上陸せよという命令は受けているが、敵対行動をとれという命令は受けていない。そんなことをするはずがない」

「コレーツに対する行為はどういうことだ」

「何もしていないはずだ。砲撃したと、そんなことは知らない」

砲撃事件は「高千穂」と「コレーツ」がすれ違った後の出来事だから、毛利艦長が知らないといっても通ったのだった。それでこの件はうやむやになった。

仁川沖海戦(4)

仁川に上陸した木越旅団 2200 人は、韓国政府を日本側に立たせることに役立ち、鴨緑江まで北上する展望を開くことができたのだった。

木越旅団全員が上陸し、日本船が全て港外に出たのを見届けた第4戦隊の瓜生外吉司令官はやおら「ワリヤーク」への最後通牒を書き始めた。「日本とロシアは事実上交戦状態になっているから貴官は麾下の軍艦を率いて2月9日正午までに仁川港を出港してこられよ。もし出て来なければその位置において攻撃を加える」という内容である。続いて各国の艦長宛てに「ワリヤーク」への最後通牒の概要を知らせるとともに「ロシア艦への攻撃は午後4時以降とするので、中立国の軍艦は安全な錨地に移動してもらいたい」という勧告状を添えた。瓜生司令官は米国のアナポリス海軍兵学校で学んでいたから、書き上げるのにそれほど時間はかからなかった。書き上げると加藤本四郎領事に、午前7時までにそれぞれ届けるよう依頼した。

ロシア領事館経由で午前11時に最後通牒を受け取った「ワリヤーク」のルードネフ艦長は、各国軍艦の艦長に「出港にあたって同道してもらいたい」と懇請した。各国軍艦と一緒に日本も攻撃できないと計算したからである。しかし第三国の軍艦が交戦国の一方に加担すればもう一方から敵対行為とみなされ攻撃される恐れがある。各艦長は懇請を拒絶、却って日本に降伏するよう勧めた。

ルードネフ艦長は「武人として降伏はできない。誇りを持って打って出る」と述べ、部下に戦闘準備を命じた。「ワリヤーク」は1901年就役の新鋭艦であり、航速24ノット、152ミリ砲と75ミリ砲各12門、47ミリ砲8門、37ミリ砲2門を持ち魚雷発射管6基を装備し、瓜生艦隊で対抗できるのは「浅間」だけだった。ルードネフ艦長としては「うまくやればなんとかなる」という気があったと思われる。「ワリヤーク」と「コレーツ」は机、椅子など戦闘の邪魔になるもの、燃えやすいものを大量に海に投棄、身軽になった。乗組員たちは家族へ最後となるかもしれない手紙を書き、英艦「タルボット」に託した。

日露海戦が始まるという情報が町中に流れ、仁川神社、西公園など高台には人垣ができた。居留民の屋根の上にも大勢の人が登って状況を見守った。

「ワリヤーク」と「コレーツ」は9日正午前、静かに動きだした。「ワリヤーク」の甲板では軍楽隊がロシア国歌を演奏、乗組員たちは声高らかに合唱した。また各国軍艦の横を通過するとき英、米、仏、伊それぞれの国歌を演奏、別れを告げるように「ウラー」「ビバー」と歓声を上げながら通り過ぎた。各国軍艦の乗組員は帽子を振

って見送った。

「タルボット」のベイリー艦長は航海日誌に次のように書き残している。「694 人のロシア将兵がほとんど確実ともいふべき死出の出撃を行っている。それなのに彼らは軍楽隊を演奏させ、我々のために万歳をしてくれている。彼らの万歳に対して、我が艦に乗り組む 400 余のイギリス将兵たちは、心からお返しの万歳を送ってやった。イギリス将兵たちは彼らを非常に気の毒に思い、鬨を挑むその負けじ魂を尊敬した」

仁川沖海戦(5)

陸上では 7000 人の日本居留民、ほぼ同数の韓国人、噂を聞いて漢城から駆けつけた人たちが固唾を飲んで見守っていた。仁川府史は居留民のひとりであった中村忠吉氏の戦況目撃実記を載せている。

「進退窮まれる露艦 2 隻、進むも亡び退くもまた亡ぶ。進んで亡ぶにしかずと健気にも覚悟を定めし 2 隻はこの日午前 11 時半、月尾島外より錨を抜き、ワリヤグが進みコレーツこれに従えり。見よ憐れむべき 2 艦は自ら死地に赴きつつあるにあらずや。居留地 7000 の眼はいまや一斉に 2 艦の上に注がれつつあり(以下略)」

居留民たちにもロシア艦は袋のネズミと映っていたようだ。

瓜生艦隊は「ワリヤグ」と対抗できる「浅間」を仁川港に最も近い位置に配置し待ちかまえていた。「浅間」は日本海軍初の装甲巡洋艦で 9500 トン。英国のアームストロング社エルジック造船所で明治 32 年建造され、最高速力 20.45 ノットとスピードでは「ワリヤグ」より劣るものの 45 センチ砲 4 門を備えていた。午後 0 時 10 分過ぎ、その「浅間」からロシア艦が近づいているという信号が発せられ、瓜生司令官は戦闘開始を命じた。

「ワリヤグ」は「コレーツ」を守るような姿勢をとって八尾島に向かって進み、前日上海から入港したばかりのロシア商船「スガリ」を従えていた。

仁川港から黄海に出るには必ず八尾島の南を通らねばならない。この航路をはずれると座礁する。しかし「ワリヤグ」は日本艦隊を避けようとしたのか八尾島の東手前で北に進路を採り始めた。誰もが「あれれ」と思っていると「ワリヤグ」も浅瀬に気づいたようで反転、正しい航路に戻った。「ワリヤグ」が八尾島の南にさしかかった時「浅間」の 45 センチ砲が火を噴いた。午後 0 時 20 分ごろだった。砲声は漢城にまで轟き、食事中だったロシアのパブロフ公使夫人はあわてて窓から庭に飛び出し、公使の手を借りて部屋に戻ったという。

海軍軍令部編纂の「明治 37、8 年海戦史」は次のように書いている。

「この日天朗に気清くして南東の微風あるも波濤起こらず。コレーツはワリヤグの左舷に位置して 0 時 15 分には彼我の距離 7000 呎に接近せしをもつて浅間は敵を左舷に見、その前路を横断しつつ同 20 分ワリヤグに向かい轟然砲火を開き、敵も直ちに応戦し、次いで浅間は右方に旋回し敵を艦首に置きて猛撃を加え、千代田は専らコレーツに当たり、浪速、新高もまた砲火を交え、高千穂、明石は機をみて援射を試み(中略)敵は損害甚だしきものの如く、艦体著しく左舷に傾き火焰に包まれつつ仁川錨地を望みて遁走し、コレーツもまたこれに従へり。1 時 15 分に至り仁川錨地に近づきたるをもつて浅間は発砲を止めて進路を反転し、諸艦艇相前後してフィリップ島付近に到り第 9 艇隊(水雷艇)の 3 隻も港口付近より来会せり。この一戦敵弾の命中するものなく我は寸害も被らず」

非常に簡単な記述である。フィリップ島というのは八尾島の西 5.5 キロにある円錐形の小島である。

仁川沖海戦(6)

日本の公式記録には簡単にしか書かれていない仁川沖海戦だがロシア側にはかなり詳細な記録が残されているようである。旭小学校、仁川商業を卒業され台北帝大在学中に学徒出陣、シベリア抑留を体験された秋山代治

郎さんは「近代日本と日露戦争」という労作を著されているが、ロシアの資料がふんだんに紹介されており非常に参考になる。

同書によるとロシアの公式戦史である露国海軍軍令部編「1904、5年露日開戦史」は、「ワリヤグ」「コレーツ」両艦長の報告書を含め、詳細に記述している。

これによると「浅間」が最初に放った一弾がなんと「ワリヤグ」の艦橋に命中、第一測距所を破壊したのである。伯爵ニロード少尉と測距手1人が即死、3人の測距手が重傷を負った。測距所は敵艦の位置を正確に測定、砲撃手に対してどの方角に何度の角度で発射するかを指示する司令塔である。その5人の担当官全員が死傷し、機能を失ってしまったのである。同時に航海長室から火災が発生、飛び散った弾丸の破片は甲板上のボートや機器類を目茶苦茶に壊した。それでも砲撃手たちは第二測距所の指示に従い反撃を開始したが、「浅間」の第二弾が6インチ3番砲を直撃、砲撃手全員と弾丸運搬員が即死した。砲台長のグポーニン少尉は膝の骨を折る重傷を負ったが出血多量で失神するまで持ち場を離れなかった。

「浅間」以外の日本艦船も砲撃を開始し「ワリヤグ」には砲弾が降り注いだ、日本の砲弾は炸裂すると破片が飛び散り周辺の物を破壊するとともに火災を発生させる下瀬火薬が使われていた。海軍技手の下瀬雅允(しもせ・まさちか)が開発した特殊火薬である。広島市鉄砲町の鉄砲鍛冶の家に生まれた下瀬は火薬に興味があり、海軍に入るとピクリン酸の研究を始めた。ピクリン酸の爆発力が強いことは知られていたが、ピクリン酸は鉄などの金属に接触すると融合して爆発する。従って砲弾としては使えないとされていた。下瀬は砲殻の内壁に漆を塗ることでピクリン酸の欠点を克服、世界で初めてピクリン酸の砲弾を作ったのである。日本海軍は日露戦争の前年、この砲弾を採用していた。

「ワリヤグ」に注がれた下瀬の砲弾はたちまちのうちに6インチ砲4門、3インチ砲5門、47ミリ砲4門を破壊、第二測距所も使用不能となった。砲弾は炸裂すると3000度の高温を発生するから、甲板上のボートはもちろん鉄板に塗ってあるペンキも燃えだし、ロシア兵は消火に追われた。多くの将兵が死傷、司令室にいたロードネフ艦長もマストに当たった砲弾の破片で頭部に傷を負った。ほぼ同時に操舵室が破壊され手動で舵を取らなくてはならなくなった。

午後0時50分ごろ、左舷喫水線の下を砲弾が貫通、石炭庫から浸水が始まり艦は左に傾きだした。ロードネフ艦長は仁川港錨地に引き返すことを決断、「コレーツ」と「スングリ」に伝えた。「ワリヤグ」が仁川港内に逃げ込んだところで日本艦隊は砲撃を中止した。戦闘は約1時間で日本の完勝だった。発射した砲弾は日本側が415発、ロシア側1105発。ロシア側は測距所が破壊されたためめくら撃ちで大量に発射したのである。しかし日本艦船には一発も当たらなかった。

仁川沖海戦(7)

仁川港錨地に戻ってきた「ワリヤグ」の姿を見て、そのあまりの変わりように各国軍艦の将兵たちは驚愕した。偉容を誇っていた4本の煙突を兼ねたマストは無惨にも崩れ落ち、甲板は焼けただれてあちこちで火がくすぶっていた。艦自体左に20度傾いていた。日本艦隊の砲撃で将校1名、下士卒31名が戦死、ロードネフ艦長をはじめ副長6名、下士卒85名が重傷を負い、その他100名以上が負傷していた。戦闘を継続できる状況ではなかった。

仁川港に停泊している外国艦船の前任艦長である英艦「タルボット」のベイリー艦長が艦を近寄せ短艇で「ワリヤグ」に乗り込みロードネフ艦長と話し合っ乗組員の救済を申し入れた。

「ワリヤグ」の負傷者・乗組員が「タルボット」に移り始めるとフランス艦「パスカル」、イタリア艦「エルバ」が救助作業に参加した。「ワリヤグ」からの収容が終わると「パスカル」が「コレーツ」に近寄ってその乗組員を収容、さらに「スングリ」に接続して乗組員と貨物を収容した。フランスはロシアと同盟関係にあったか

らだった。

作業が一段落するとルドネフ艦長はベイリー艦長に「日本に拿捕されるのは困るのでこの場で爆破し沈めたい」と告げた。しかしベイリー艦長は難色を示し、「他の艦長と協議し、正式に返答したいと語り、急遽艦長会議が開かれた。

艦長たちは「ワリヤーククラスの艦船を爆破すれば港内の全ての船に影響が出る」として反対を決議、ルドネフ艦長は爆破ではなく船底のキングストン弁を開いて沈めると約束した。「コレーツ」については艦体がそれほど大きくなかったため協議の対象にならなかった。

午後4時2分、「コレーツ」は大音響とともに爆発した。ベリヤーエフ艦長の指示で爆破されたのである。八木硝子店の店頭のランプが空気の振動で吹き飛び地面に落ちて割れたほど爆風が激しく、「コレーツ」からは沢山の物が空中に舞いあがった。多くの書類が空中をさまよったすえ、仁川の街に舞い降りた。記念のため拾って大切に保管していた家はかなりあったという。

「コレーツ」爆破後まもなく「ワリヤーク」のキングストン弁が開かれ、火がつけられた。「スングリ」についても同じ措置がとられた。2隻の船は盛んに炎をあげながらも徐々に沈み、午後10時ごろ海中に姿を消した。

数千人の市民が高台や屋根の上で朝から戦況を見守っていた。ロシア艦の惨状を目の当たりにしただけに、日本側も相当の被害を受け、死傷者も出ているのではないかと心配する人が多くなった。

午後11時ごろ、瓜生外吉司令官から仁川領事館に「本日の海戦に日本艦隊は些少の損害なく、兵員また1人の死傷なし」という連絡が入った。市民の中から歓呼の声が沸き上がった。

仁川沖海戦(8)

仁川港沖のフィリッパ島付近に集結していた日本艦隊の瓜生外吉司令官は、9日午後4時過ぎの大爆発音を聞くと直ちに巡洋艦「明石」と水雷艇「真鶴」に偵察してくるよう命じた。

「明石」と「真鶴」は錨地に戻って観察すると、「ワリヤーク」は左に大きく傾き、後半部分は沈みかけていた。また舷窓から炎が噴きだし、甲板もあちこちで燃えていた。人影はなかった。周辺を見渡すと英艦「タルボット」の周囲にボートが群がっており、どうやら「タルボット」に救済されたと見当がついた。「コレーツ」の姿はなく月尾島の近くに「コレーツ」のボートが5隻浮いていた。「スングリ」は月尾島の東に停泊していたが火災を起こしていた。夕闇が迫ってきたため「明石」と「真鶴」はフィリッパ島付近に戻り。司令官に報告した。

翌朝、瓜生司令官は仁川に加藤本四郎領事と漢城の林権助公使に対し露艦の負傷者・乗組員の扱いについて外交団で協議するよう要請した。加藤領事はまずロシアのポルヤノスキー領事に「負傷者以外は捕虜として収容する」と通告した。これを聞いた漢城駐在のパブロフ公使は米国の公使に米艦「ヴィックスボルグ」に全員を収容、上海に届けてほしいと申し入れている。

結局各国の公使が集まり、日本が捕虜にしないかわり乗組員は日本との戦闘に今後参加しないこと、上海以北には立ち入らないことを条件にして帰国を認め、各国軍艦が輸送するなどが決まった。フランス艦「パスカル」には「ワリヤーク」のルドネフ艦長と「コレーツ」のベイリー艦長を含め士官17人、下士卒199人、計216人、イギリス艦「タルボット」には「ワリヤーク」の副長以下の乗組員275人と「スングリ」の乗組員53人、イタリア艦「エルバ」には「ワリヤーク」の士官7人と下士卒174人、計181人が割り当てられた。米国は「中立国が交戦国の一方の兵員を輸送するのは国際法上疑問がある」として輸送を断った。

「パスカル」の2月16日出港が決まるとロシアは漢城の公使館閉鎖を決め、パブロフ公使と公使館員、警護兵200人も「パスカル」に乗って上海に向かい帰国することになった。公使一行は12日午前7時25分、日本陸軍1個中隊が護衛するなか京仁鉄道の特別列車で西大門駅を出発、10時30分仁川に到着した。そこからポルヤノスキー領事も合流して「パスカル」に乗りこみ、予定通り出港した。

「タルボット」は2月20日シンガポールに向け、「エルバ」は2月25日香港に向けてそれぞれ出港した。

船旅に耐えられないと判断された重傷者24人については仁川に残って治療に専念することになり、仁川赤十字社病院に收容された。同病院は英国教会の病院を借りて急遽作られたもので、日本公使館付きの和田八千穂海軍軍医少監と松村三省仁川病院長が治療にあたった。看護婦については、海戦の直前加藤領事夫人の直枝さんの発案で結成された仁川特志看護婦人会が担当した。仁川や漢城在住のご婦人たち約50人がボランティアで集まった組織で、日本の負傷兵のために作られた婦人会だったが、日本側に負傷者はなく、ロシア兵を助けることになった。負傷兵は順調に回復、3ヶ月後、愛媛県松山赤十字病院に移された。

仁川沖海戦(9)

仁川港錨地に沈んだ3隻のロシア船について居留民団は「自分たちに引き揚げさせてほしい」と領事館に申請した。しかし政府はこれを許さず、「ワリヤグ」は海軍が引き揚げて再利用することにした。なにしろ「ワリヤグ」は5年前に米国フィラデルフィアのクランプ社で建造された新鋭の巡洋艦であり、改修すれば戦力になると考えられたからだった。爆破された「コレーツ」はある福岡県選出代議士が請け負い、スクラップとして処理されることになった。

新井有貫海軍少将をリーダーとする作業班は3月9日から「ワリヤグ」の引き揚げ作業にとりかかった。しかし作業は難航した。周知のように仁川は干満の差が激しく10数メートルもあり「ワリヤグ」の艦体は満潮時にはほぼ水没しているが干潮時には3分の2が海面上に出ている状態だった。潮が変わる時には潮流が激しいから作業はできず、作業できるのは1日2時間程度。まず石炭と砲弾を処分しなければならないが備砲の中にも砲弾がこめられており、酷寒のなかでの作業ははかどらなかつた、ロシア兵の死体が出てくると作業を中断し、氏名を確認して海軍の慣例に従い葬送の礼を行わねばならなかつた。

2隻の工作母船を横付けして工事を進め、艦体を引き起こす努力を重ねようやく9月18日、傾斜度24度にまで矯正することが出来た。そこで排水作業を開始したがポンプの能力が悪くて上手くいかず、冬も近づいたので11月中旬、作業を中断した。

再開したのは翌38年4月。海中に木の棚を作り、高性能のポンプを数台据え付けて排水を行った。この結果8月8日浮き上がり、8月22日「宗谷」と名前を改め戦利艦として帝国海軍に編入された。自力航行ができるよう仁川港内で3ヶ月間汽罐や艦橋などの応急修理が行われ、11月5日、佐世保に向け出港した。佐世保でさらに補強工事を施された「宗谷」は横須賀の海軍工廠に移され全面改修工事に入った。工事は2年余に及び、新しく建造した方が安くついたのではないかという批判が出たほどだった。

「宗谷」が就役したのは明治40年で42年からは練習艦隊に配属され、遠洋航海で海軍軍人を育てる役割を担った。あの山本五十六が大尉時代、「宗谷」に1年2ヶ月乗船していた。しかし第一次世界大戦が勃発、日本とロシアは同盟側について友邦となったため大正5年(1916)4月4日、ウラジオストックでロシアに引き渡された。

「スガリ」も海軍によって引き揚げられ、海防艦「松江」として海軍に編入された。第一次世界大戦では青島攻略戦に参加したあと測量船になった。

「コレーツ」は解体され、部品は明治40年ごろまで希望者に販売されていた。

仁川にはこれらロシア艦船の遺品がいくつか残っていた。筆者が通った旭国民学校には「ワリヤグ」の12インチ砲弾の殻が正面玄関前に記念碑として建っていた。現在も、同校敷地を引き継いだ新興初等学校にそのまま残されている。旭町の日蓮宗明照寺の国旗掲揚台は元「ワリヤグ」のものだったし、仁川ではないが、福岡の修猷館高校には「ワリヤグ」の食堂にあった鐘が資料室に収納されている。なぜ同校にあるのか、いきさつはわからない。

仁川沖海戦(10)

「ワリヤーク」のルードネフ艦長がペテルスブルグに帰り着くと、思いがけないことに歓呼の声で迎えられた。ニコライ 2 世は「劣勢と分かっていたのに敢然と立ち向かったのは武人の鏡である」としてゲオルギー勲章を授与し、侍従武官に任命した。しかし 1905 年 11 月「アンドレイ・ベルボスバーンヌイ」艦長のとき、水兵たちがニコライ 2 世の勅語の是非を問う集会を開くのを阻止しなかったとして退役させられた。日本でも評価は高く、明治天皇は 1907 年、旭日重光章を贈っている。

日本から返還された「宗谷」は元の「ワリヤーク」となりウラジオストックの太平洋艦隊に編入された。しかし返還されて 7 ヶ月後の 1916 年 11 月、ムルマンスクに向けて航行中汽罐が故障、英国のリバプールで修理していたときロシア革命が勃発した。修理費を払わないという理由でリバプールに抑留されていたが 1918 年になってスクラップにされることになりドイツに向けて出港したがスコットランド沖で激浪にさらされ 2 月 25 日沈没した。2007 年 9 月 8 日、沈没地に近いスコットランド・レンデルフットに記念碑が建てられ、ロシア政府高官が多数出席して式典が行われた。

ソビエト時代も「ワリヤーク」の行動への評価は高く、仁川沖海戦 50 周年にあたる 1954 年、海戦の生き残り 15 人に「勇敢賞徽章」を授与、ソビエト連邦最高会議幹部会は海軍の艦船 1 隻に必ず「ワリヤーク」の名称を用いることを決議した。

2 代目の「ワリヤーク」になったのは 4400 トンのミサイル巡洋艦だった。1963 年就航し 1990 年ごろ除籍された。

3 代目の「ワリヤーク」と命名されたのは 67500 トンの航空母艦だった。クリミア半島の黒海造船工場で建造中の 1991 年 12 月ソビエト連邦が崩壊、クリミアはウクライナに帰属することになった。当然のように「ワリヤーク」はウクライナの所有するところとなった。その時点での完成度は船体が 100%、機関が 80%、その他部品が 20% であと 7 億 5000 万ドルあれば完成するとされていた。しかし黒海にしか海岸線がないウクライナには航空母艦は無用の長物。スクラップとして処理することにした。

これに目をつけたのが中国。中国の退役軍人が社長をしていたマカオの商社を使い「海上ホテルにする」という名目で取得させた。価格は 2000 万ドル。けれども危険を察知したトルコがボスポラス・ダーダネルス海峡の通行を許可せず、2 年間海岸に係留されたままになっていた。中国政府はトルコと交渉、トルコへの中国人観光客を増やすという約束をして 2001 年、同海峡を通過して中国に回航された。

中国も最初は航空母艦として活用するか、解体して航空母艦の構造、造り方を研究するか迷っていたようだ。2005 年になって大連の造船所で建造作業が行われているのが確認され、航空母艦として活用する方針であると分かった。航空母艦第 1 号を早く手にしたいという戦略だったと思われる。「遼寧」と命名された空母は 2012 年就航、極東・東南アジア諸国ににらみをきかせている。

空母「ワリヤーク」を除籍したロシアは 1996 年、太平洋艦隊のミサイル巡洋艦「チェルボナ・ウクライナ」を第 4 代の「ワリヤーク」に改名して「ワリヤーク」の名前を残した。13,000 トンの巨体で 2004 年の仁川沖海戦 100 周年記念式典で 300 人のロシア高官を乗せ仁川に寄港している。また 2011 年には舞鶴を訪れた記録がある。

仁川沖海戦(11)

仁川沖海戦について、ロシアのニコライ 2 世は「宣戦布告前の攻撃であり国際法違反である」と繰り返し国際世論に訴えた。我が国の歴史書のなかにも同様の見解を述べているものがある。日本がロシアに宣戦布告

したのは仁川沖海戦後の2月10日だから確かにそう言えなくもない。海戦の稿の締めくくりとしてこの問題を取り上げてみよう。

筆者が若いころ読んだ日本の歴史書のほとんどはニコライ2世の主張に近いもので、日本の行動を非としていた。例えば井上清の「日本の歴史」(岩波新書)では次のように書かれている。「1904年2月8日、日本の艦隊は、仁川と旅順のロシア艦隊を不意打ちし、19日はじめて宣戦布告した。宣戦前に相手の重要基地を闇討ちするのは、日清戦争でも、このときでも、後年の日中戦争でも、日米戦争でも、日本軍部のつねであった」。

毎日コミュニケーションズ発行の「明治ニュース事典」では、歴史学者の意見を総括して「仁川や旅順の海戦は国際法上問題のある行為で、明らかに布告前の奇襲であった」と書いている。

我々の世代は、真珠湾攻撃が布告前の卑怯な不意打ちであったとアメリカに叩き込まれている。とくに広島県で育った筆者は「真珠湾を奇襲したのだから、原爆を落とされても仕方がない」とよく聞かされたものである。布告前の奇襲は悪という意識が強かった。

しかし仁川沖海戦も真珠湾と同じく国際法違反という意見には違和感を覚えた。第一、国際法違反と主張したニコライ2世に同調した国はなかった。ロンドンタイムスにいたっては「日本の行為は国際法違反どころか近代戦の多くの範になるものである」と賞賛している。学者たちは「ロシアの強大化を恐れ、各国が親日的だったから」としているが、それだけではない。

まず日本が2月6日に国交断絶を通告して、いつ交戦が始まってもおかしくないという状況をつくっていた。またニコライ2世が「日本軍が北緯38度線以北に上陸しようとした場合には徹底して戦え」と指示していたことが分かり、皇帝自身も宣戦布告なしの戦闘を想定していたと推定されたこともロシアに不利となった。

しかし最大の理由は、戦争を始めるには宣戦布告が必要という国際法が確立していなかったことである。データをみると、1755年から2004年までの150年間に発生した戦争は110件あるが、そのうち宣戦布告して始めた戦争は7件にすぎない。

戦争を始めるには宣戦布告が必要と国際法で定められたのは日露戦争終結2年後の1907年に開催されたハーグ平和会議で採択された「開戦に関する条約」によってである。通常、ハーグ条約と呼ばれるこの条約は第1条で「締約国は、理由を付したる開戦宣言の形式または条件付開戦宣言を含む最後通牒の形式を有する明瞭かつ事前の通告なくして、その相互間に、戦争を開始すべからざることを承認す」と明記したのだった。仁川沖海戦はその条約締結前の出来事であり、法は遡及して適用されないから国際法違反とはいえない。違反とする歴史書はイデオロギーに影響されたか自虐思想に基づくものといえよう。

蛇足ながらハーグ条約後の国際社会の動きについてつけ加えると、理想主義が主流となって戦争そのものを悪ととらえて国際連盟規約では戦争を否定、国際連合憲章では武力による威嚇、武力行使を慎まなければならないとしている。ところが第二次世界大戦後、戦争や武力闘争は続いているものの、宣戦布告して始まったケースはない。宣戦布告は今や死語になっているのである。